ひ醉た躰にして、ナ、合點か。ハア。今こそ忠心見屆けた、徒黨に加へ東の發足。ナニ連判に加へられんとな、ハ、、、、。ホ、悅びは理り、最前其方が持來りし短刀は似せ物、誠の刀人手に渡してよい物か。樣子は聞たと駈出る、目玉をはすにさそくの寺岡。コリヤ平右衛門、些座の褒美と投出す金。詞「此金は。薄雲小岩が身の代金。ヱ、有難い、折からどや〳〵仲居共、詞「由良樣爰にかいな、一へん尋ねた程にの。イヤサ近年の二日醉、餘まりつらさに醉ざまし、川風に吹れて居るはい、もう〳〵酒は呑ぬ〳〵、サア〳〵仲居ども送れ〳〵、唄「いなば祇園の朝嵐、森の小烏可愛とおしやる、駕やれ先かた跡かた共、さつさ押せ〳〵打連て、山科さして三重「急ぎ行

早野村

廻り庇に萱の屋根、萱傳へたる家の風、南を請て暖かな、福祐の暮し一郡に、二もなき系圖三左衛門、重義といふ鄕士有けるが、何くらからず滿る月、闕る習ひか子息勘平、萬事限りの床に付、虛勞の上にさし出る、癪は病ひの扁鵲も、命を救ふ匕もなし、一家の使懇家の見舞、門外込合其中へ、頼みませうと案内に、どふれと答へ、姚早枝、詞「イヤ身共は大星由良之助より參つたと、狀箱渡せば受取て、入んとするを、詞「ア、コレ〳〵お返事には及ばぬと申付たれ

ば、其儘置て罷るぞと、歸るにすれ合來る奴、コレサ物さ問申すべい、勘平樣は家躰に寐まり召るか。ハイ若旦那樣は御病氣で御寢なつてゞござりまする、どなたからの御使。イヤ身共は矢間重太郎より參り申した、お見やれ狀は〆四五本慥に屆けてくれべい迚、諸方より拙者が旦那へ、頼み參つたから渡し申すと言捨て、口早尻早足早に、京道さして立歸る、ヤレせはしやと姚共、溜りし書狀一ッに持這入る病氣をそろ〳〵と、退く醫者を送出る、嫁のお梅は手をつかへ、詞「三左衛門御挨拶に出まする筈ではござりますれど、晝夜の看病に勞れ、先程より休み居まする故、少しの内御用捨をおなし成れて下さりませと、眞思ひの孝行は、眞實見へて可愛らし、詞「コレハ〳〵御叮嚀、扨氣の毒なは御病躰、思慮度に過たる心氣の衰へ、其上鬱癪を兼たれば、とかく難治の症と存ずる、所詮全快は心元なふ見へまする、最早兩三日の中でござらふと、落命遺見功者の、醫師を送りてしほれ居る、お梅が心汲取て、姚共も力を付け、詞「イヤ申し御寮人樣、何ぼふお醫者樣があの樣に言しやつても、方々へのお命乞、神佛と親旦那、お前樣の精力で、追付本腹なされませふと、心詞もたほらしう、言れて胸へせきかくる、涙見せじと押包み、便りない身を深切に、言てたもる心ざし、嬉しいぞや去ながら、詞「元わしは勘平樣とは徒弟同士、今の父母といふは伯父樣伯母樣、早ふ二人に祝言させ、初孫の顏が見たいとおつしやつたが、去年の春伯母樣はお果なされ、悲しいは勘平樣、詞「殿樣の凶事をお國へ告

んと、早打に此所を通らしやんす折も折、伯母様の御葬禮に、行合しやんした其甲斐も、亡骸にさへ逢れぬとは、ほんに〳〵侍の身の上程、あぢきない物はないはいのふ、詞「夫から御家中もちり〳〵と成、お歸り有しは氣の毒なやら嬉しいやら、悦ぶ間もないァノ御病氣、もしもの事が有たなら、わしや何とせうどふせうと、おろ〳〵涙妙共、お道理様やと一同に、汲取涙花の雨、晴間も更になかりけり、折から病家に手をたゝき、お梅〳〵と呼聲に、詞「ァレ勘平様のお目が覺た、我身達はお藥を、早う〳〵と言付やり、ドレお脊中をさすらふと、氣輕に立て入にけり、人なき隙を窺ひて、立戻つたる醫者道鐵、あたりを見廻し立どまり、詞「伴内様の内意によつて勘平が様子を窺ひ見れば、最早脉は上つて有れど、どふやら様子の氣ぶさいなは、最前來た數通の狀、とつくりと見屆け注進仕たら、何でも御褒美仕てこいと、欲悪無道の鵶眼、光る白露前栽の、繁みへ「こそは忍び入る、誠の書にも違ふ退去は、緣薄雲の我名さへ、うしと引るゝ稚子に、見せたや見たや妻鳥の、塒慕ふてはる〳〵と、たどりて爰に來て見れば、美々敷搆へ氣後れし、イむ軒に降かゝる、時雨はよいしほさし窺ひ、詞「俄の雨に難義致します旅の者、大事なくば暫しの舍り、御赦されてと詞付、げしう有ねば呼入て、詞「よもや女中のお一人では有まい、定めてお連もござんせう、イヱ〳〵連と申したら此稚子、辨へなき者を賴みに、知ぬ長路を迷ひまする、ムゝハテナ、見れば美しい染絹に包んで有るは、三味線に見へ

まするが、長の旅にはそぐはぬ物を持てござんすな、成程御不審は御尤、こりや太切な人の筐、どうぞ此主に逢たい見たい計かりに、はる〳〵と參りました者でござります、今で思へば此三味線の模様が氣がゝり、尤互の合點にて、飽ぬ別れはしたけれど、思ひ切ぬは女子の常、忘れ安いは男氣の、早秋風と色かはる、紅葉の蒔繪すれ落し、身のはかなさは唱歌にも、言れませぬと涙ぐむ、扨は噂の薄雲と、悟れどわざと何氣なふ、イヤもふ聞ぬ先から哀らしうて、面白そうな事、幸ひ徒然の折と云ひ、お前は旅の憂晴し、其咄しを歌に寄、彈て聞して下さんせと、望むは夫に聞せたさ、見せもし見もしさせたさに、明る障子の打臥て、痩衰へし顔かたち、ノウなつかしや傷はしや、其いたはりと知ぬ身の、うさもつらさも打明し、言たい事の數々は、人目の關にせかれても、留らぬ物は涙にて、むせ返りてぞ泣居たる、詞「サァ〳〵旅の女中様、御寮人様のお望を、早ふ〳〵と女共、そゝるは浮氣憂目をば、三筋の糸の音を忍び、詞「語るに付て悲しきは、コレ此稚子の身の上でござりますはいな、父は播磨の何某迚、人に知れし武士よ、母は都の女郎の果、此子をまふけ育しが、詞「過にし春の末つかた、我に此子を預け置、いたはしやな、此おさあいは、父よ〳〵と戀慕れ、詞「ヲゝ〳〵目が覺たか可愛やゝ〳〵、コレ乳〳〵と含めても、爺たい〳〵、アレ〳〵〳〵あの様に言暮し、夜明の鳥と諸共に、まどろみもせず泣明す、餘り見るめが悲しさに、來にくい所へ連て來た、心を不便と思召し、御寮人様お

取なし、お願ひ申上ますと、隱し包みし薄雲の、晴て親子の名乘合、お慈悲〳〵とかきくどき、只伏沈む計なり、詞「ヲヽ、お道理じや、尤でござります〳〵、コレ申しお國から、お供した者共の、噂に聞たお二人の中、私に遠慮遊ばさずと、どうぞ親しいお詞を、かはして進ぜて下さりませ、ァレ〳〵あのいたいけな愛盛り、顏が見たふはない事かと、いへど答へず勘平は、瞬しげく數通の書面、くり返し見て火鉢に投、火中のじやうとなす計、詞「ヱヽ、餘まりな思ひ切、お前はお見捨なされても、此梅はよう見捨ませぬ、必ず氣遣ひさしやんすな、其子はわしが育ると、抱き取んとする所を、ヤレ聊爾なり控へよと、刀引提三左衛門、つか〳〵と歩み出、詞「我子の武道に障礙をなせし、魔王といふは夫なる賣女め、高の師直仇と成たる其起りは、其女をかほよ御前に仕立、僞り欺せし故にこそ、鹽冶殿につらく當りしを憤り、殿中にて刄傷に及び、切腹召れし根を探らば、其女めより起りし事、討放す共何の事かは、ァヽ年寄て武邊も氣丈も衰へたるが、儕らが仕合せぞと、父の怒りは勘平が、肝に碇さし切る障子、はたと轉びて聲を上げ、詞「いつそ死たい殺してほしい、御機嫌直る事ならば、何の命が惜からふ、其代りには此ぼんを、孫よといふて下さりませ、コレ拜みます、お情でござりますはいなァ〳〵、詞「ヱヽ、とゝ樣お心强い、母御は兎も有れァレあの子は、現在あなたの、ヤァ孫抔とは慮外至極、不義なる中に生れし小躰、我屋敷の土も踏すべきか、早く立去れ、行おらふと、言へどもいま

く鶯鳶の、陸に迷ひし心地して、いとゞ見る目もいぢらしき、詞「ハテ扨出よといふにしぶとき奴、イデ引立んとずんど立、裾に縋つて、詞「ァァ〳〵待て下さりませ、お心に入ぬ事ならば、もうお願ひ申ませぬ、がせめて一夜か二夜さを、ヤァ面倒なと振放し、庭にかけおり衿がみ取、情用捨もあらけなく、外面にがばと突出せば、わつと子も泣親も泣、道理は何ぼ道理でも、孫は子よりも可愛いと、言には違ふ親御樣、餘まり難面胴欲と、恨かこちてさめ〴〵と、身もだへしてぞ歎きける、三左衛門聞耳立、詞「ァレ表に小兒の泣聲は、ヱヽ聞へた捨子じやな、適人間と生れし者、畜類などに喰はせんは無益の殺生、お梅拾ふてやらふかい、ヱヽそんならあの子を捨子にして、ハテ父母も知ぬ孤子、養育すれば迚誰點の打人が有ふ、ソレ早く拾ふてやりめされと、思ひ掛なき照降の、かはらぬ内にと心も空、詞「薄雲樣も嬉しかろ、夢ではないかと思はるゝと、恙ほれし梅も胸ひらき、肌に稚子抱取て、ねん〳〵ねんねこせい〳〵、ねんねが守も入そうな、事ではないかと目交する、詞「ハイ〳〵〳〵、申し次手に私もあのお子の、乳母に抱へて下さりませ、心がゆりたか乳のはり、早ふ上たふでござります、ム、ハ、、、、、ぬかりもない自由な世界、子を拾つたれば早乳母迄が調ふた、成程次手に抱へてやらふ、コリヤお梅、其小兒連て來い、ドリヤ〳〵、扨よい器量、目付口元鼻筋迄、扨よく似をつたな、何じや祖父よといふか、ヲヽ〳〵けなやつよ、よく言つたと、堅い親父のむず折は、朽木の榾に茅ば

へせし、苔の花と見るぶさを、撫つ按りつ餘念なく、詞「コリヤ誰が子寶、あなたのじや、お前のじや、二人が中のお手車、廻る廊下の奥座敷、祖父もうかれて付添行、無慙やな勘平は、君父の恩を身一ッに、受てぞ重き病ふの床、漸に起直り、詞「法眼の配劑的中せしか、鬱癪の痛みも忘れし此元氣、我達も嘸看病に勞れたで有ふ、勝手へ廻り休息せい、早く立よと人を拂ひ、死病にせまる今月今日、大星殿も御發足と、傍輩共よりおらせの文通、詞「たとひ親子兄弟たり共、洩すまじと誓紙の血判、此事兼て親人へ、仕官と言立暇を願へど承引なく、所詮忠孝全くは、行はれぬ身の不運、忠には親をも捨るが習ひ、此儘告ず打立んと、枕の刀杖となし、立上れ共踏ためず、どうど轉びつ這廻り、心計いはやれ共、身躰自由ならばこそ、詞「ヱ、淺ましや、筋骨一度に碎くる如く、一足だにも引れぬ苦痛、さあれば迚斯迄も、思ひ込だる我存念、やはか晴さで置べきかと、又立上れどせき登す、虚熱にくらむ眼を見開き、詞「ヱ、いかに天數盡れば迚、節義を立る際となり、助りがたき此業病、神も佛もケ程迄、見放し給ふか口惜やと、無念の涙はら〳〵〳〵、面に流るゝ發汗の、あせれば氣力もいとゞ猶、次第〳〵に弱り果、今を限りと見へければ、詞「ハヽァ是非もなや、迚も全快叶はずば、むざ〳〵病に死んより、潔く腹切て、師直を欺きし、艶書の誤りを償ひ、一ッには又亡君の御跡慕ふ殉死ぞと、思ひ極めて腰刀、腹に突立引廻し、既に切行息の緒も、糸によるてふ武士の、物の哀やとゞむらん、斯とは知で

いそ〳〵と、お梅は夫に稚子を、見せる次手に、詞「薄雲樣、久し振で傍へ行しやんしたら、ぼんより先へ抱れたからふ、ァヽじら〳〵と何おつしやる、あんまり粹な奥樣で、けつくどふやら氣が張やうな、詞「ヲヽ、何の樹酌、サァお出と、何心なく唐紙を、あけに伏たる其有樣、二人は二目と見もやらず、わつとたまぎり泣出す聲、耳にこたへて三左衛門、遣戸突明かけり出、なむ三寶と仰天し、慌れ果たる其所へ、下部一人罷出、詞「大星由良之助樣御入來なりと取次す、ナニ大星氏の參られしとな、ヤイ兩人の女共、聲立てさげしまるゝか、ほへな泣なと呵り付、襖引立出向ふ、光りを隱す明鏡の、うらむらくは戰國に、顯はれざる此一人、案内に連て打通り、互に禮讓席を定め、詞「暫く面會申さねど、躬が病氣度々御尋ねの使者に預る事、淺からぬ御懇志と、挨拶すれば由良之助、ヤヽ顔色を打守り、詞「山根より額にかゝり、愁ひの白氣顯はれしは、是正しく死別の相、推量りし事ながら、保養叶はず子息勘平、死去召れしと覺へたり、殘念さよと賢察に、三左衛門横手を打、成程只今自殺仕つた、ナニ生害召れしとな、シテ其趣意は何と〳〵、イヤ其趣意は早野勘平、直々言上仕らんと、はつと燃立陰火に連、忽然として庭前に、影の如くに顯はす姿、大星驚き打見やり、詞「闇浮に沈む身を以て、遺書に宿意を殘すべきに、我に直〳〵告んとは、扨は誓紙の掟を守り、父にも大事は包まれしな、詞「ハッ去故にこそ勘平が、身躰せまる身の不運、只何となく親人に、仕官の望有と言立、暇を願へど承引な

く、行ば不孝留れば不忠、二ッの道に苦しめど、忠義に孝はかへ難く、各方と一統に、是非鎌倉へ御供と、心計は早れ共、一足だにも引れぬ業病、けふ發足の數にもれ、埋木となる口惜さ、刄に此身を切あばき、身は死しても一念は、東の御供仕り、本懷遂いで置べきかと、無念貫く身の懺悔、胸にひつしと三左衛門、こたへる後悔こたへ兼、立聞二人は轉び出、はつと計に取亂す、詞「ヤア見苦しい、大星殿のお入の席、未練至極と呵るを制し、さな言れそ三左衛門、此期に及び何遠慮、あり〳〵姿を顯はす勘平、親子夫婦の暇乞、とくと對面遂られよ、ハッ有難きお救しなれ共、一世に限る緣やらん、拙者が眼には、ィヱ〳〵〳〵現在二世の我夫と、定る私もわたしにも、なぜ此の子にも〳〵にと、俤見せては下さんせぬ、イヽヤ對面叶はぬ〳〵、本意も遂ずやみ〳〵と、非業に死したる此勘平、亡君の思し召憚り有恐れ有、黄泉の障りは躬三治郎、東の御供お赦し有らば、影身に付添亡君の、宿意を晴さん我願ひ、偏に賴み奉ると、思ひ入たる義心の程、由良之助感じ入り、詞「ホヽウ出かされたり〳〵、其一心を頭に照し、四十餘人が鑑とし、彼地の働きなす功、今日より其躬、早野勘平光興と名乘らせ、義臣の列に差加へ、大星後見なすべしと、受合詞は是正に、生ての加增百萬石、死しては千僧萬僧の、供養に增る恩德ぞと、悅びの聲諸共に、姿は冥々朦々と、かき消す如く失にけり、悲歎の涙大星は、三左衛門に打向ひ、詞「恩愛の別れに一滴の、涙さへ催ふされぬは、大丈夫と申すべきなれ共、

夫は餘まりなる御愼み、返つて未練に見へ申す、イヤモ最前より英雄の手前を耻、袖には中々落さねど、心にたぎる老が涙、御推量下されい、ハテいらざる御遠慮、スリヤお赦し下されふや、ヱヽ、忝なやと取亂し、詞「ヱヽ、聞へぬぞよ恨めしい、なぜ打明てくれなんだ、斯る由々しき企と、露聊知るならば、悅び進んで見立ふ物、跡先の辨へなく、呵り怒つてとじめたが、悔しいわいやい、殘り多いわい、左程磨きし魂を、土くれ瓦と捨さした、愚痴頑な此親には、生れ增つた嗚呼のやつ、詞「身は死しても魂魄は、躬に付添存念を達せんとは、ヲヽ、出かいた適と、いふ聲咽にむせ返れば、お梅はいつそ正躰なく、詞「お聲を聞ねばなま中に、是程悲しう有るまい物、いかにお主へ言譯迚、たつた一目お姿を、見せたといふても何のまア、よもお咎は有るまい物、斯言事とは露しらず、とヽ樣やかヽ樣の、お赦し受て夫婦じやと、詞に結ぶ下紐も、解しない程日を數へ、待た甲斐ない此おだら、心を推して下さんせ、詞「ヲヽお道理でござります、私も丁度一年を、隔憧れて漸々と、今來て今の憂別れ、こんなはかない有樣を、何の此子に見せう迚、連て來たのじやない物を、斯いふつらさが餘所外に、又有事かお梅樣、詞「サイナア申し薄雲樣、殿御に放れる身の因果、子を先立る親の業、果報拙い此孫めが、生先思へば不便やと、三人が歎き大星が、汲取る涙俱涙、涙々は津の國に、名に負ふ昆陽の池水に、五月雨增る風情なり、歎きの中に稚子は、大星に打向ひ、詞「伯父樣、鎌倉へ行しやるなら、此勘

平も行まする、連て往て下されやと、今迄頑是泣稚子、打てかへたる有様に、驚く人々由良之助、詞「死靈の付添ふ此躬、尤かうこそ有るべけれ、猶も様子をためし見んと、一腰あたへコリヤ〳〵勘平、詞「發足の手始は何と〳〵と問かくれば、ヲヽ師直が白髪首、眞此様にとずんと立、松が枝丁ど切折れば、忍びし道鐵眞逆様、落るを透きず稚子が、打て捨たるふしぎの働き、詞「ホヽウ其いさほしこそ幽冥より、此世へ貫く忠心の、是ぞ誠に一番鑓、出來た〳〵、約諸なれば此稚子、是より召連同道せん、二人の女も付添ふて、下るが夫へ追善供養、用意〳〵と大星が、情の詞に三左衛門、飛ましさつて三拜し、詞「ハヽヽヽヽ忝き御計らひ、躬めが存念を、立させ給はる御厚恩、何を以てか謝すべきと、悅び涙ぞ道理なる、折からかしこに鐘の聲、早發足の刻限と、由良之助の迎ひとして、入來る諸士に同伴と、つゝ立大星、老人にさらば〳〵と暇乞、二人の女も隨ひて、稚子脊にかい〳〵敷、出行東の首途に、目にこそ見へねあり〳〵と、付添死靈の一念は、あはれすざまし三重「定めなき

道行春の富士

花鳥の、色香艶しき春の日も、けふの現はあすの夢、昨日は今日の夢となる、光陰早野勘平に、緣薄雲が憂事の、忘れ筐の三治郎を、四十餘人の其數に、願ひ叶へば親も子も、仕合せよしの

脊に乘て、お梅が手綱ひく駒の、あしの津の國跡に見て、東路チクリ「さしてたどり行、空も霞みてうらゝかに、柳の目元ほのぼらしく、梅に〳〵ほしの散し書、封じる儘に受取て、空行雁も嘯にて、夫と都も程過て、鳩の海づら吹すさむ、風に胡蝶のひら〳〵と、あなたに浮れこなたに狂ひ、花有木にもひら〳〵、花なき草にもひらりひら〳〵扇のもと、うつらふ花の二人の女、脊はら〳〵しどけなく、戯れ遊ぶ稚子を、連て過行鈴鹿越、心も關や角文字の、伊勢路尾張路三河路を、過行旅は同じ道、同じ鹽冶の義士達も、東下りの忍び路を、お梅が見付てあれ〳〵〳〵アノ山伏や獅子舞は、千崎様や竹森様、ほんに跡なは十太郎様、ヲヽイ〳〵と招かれて、やつす姿のとり〳〵に、渡り急ぎし越後獅子、夢の占越後の獅子は牡丹持ねど富貴はおのが、姿に咲せ舞納む、姿に咲せ舞納む、扨其次は千崎が、詞「ヤレ〳〵〳〵〳〵〳〵哀はかなき早野勘平が身のなる果をな、聞ば聞程無慙と言ふか、大星殿のヲ一味に加はり、神文誓紙の堅い約束、親にかくして東の旅立、願ふも忠義と元より知ねば、親は片意地中々赦さず、明せば諸士への言譯立ねば、殆んど困つて切腹したとは、悲しいはかない、哀なこつたよホウ、詞「せめて〳〵其子に手柄をさすがナ、草葉の陰への追善供養よ、おいらもとも〴〵力を添べい、扨〳〵〳〵〳〵、コリヤ又どうした、哀なこつたよ、さらば〳〵と傍輩の、情を餘所に言敎へ、行く人々のいさましい、忠義の先駈見るに付け、亡我夫も世に有らば、同じ東の旅はゞき、いとけ

ない子を双方が、夫よ夫よと悔恨もしたり、妬まれた、昔がましと夕霜の、おく底もなふ打解し、うき身は悲しい此わたし、嫁といふのは名計で、白齒も染ず袖とめず、殿御の肌はどんなやら、憎い可愛の譯しらず、死で未來の行先は、賽の河原へ行まする、ィ、ユイナお梅樣、私はお前が浦山しい、假の契りをなま中に、かはしてけつく增す輪廻、抱て寐る程罪深ふ、得忘れぬのが女の因果、推量してと諸共に、絞る袂の雨露に、草葉も浸す計なり、三人が哀汲やらん、空かき曇りさら〳〵〳〵、さつと催す春雨に、濡まじ物と笠取り〴〵、木影をさして三重行空の、ふりみ降らずみ定めなき、旅は色々うきが中、あなたの松陰花やかに、臺笠たて笠大鳥毛、行列揃へてぼつ立る、武門の曠をあり〳〵と、三保の松原氣色よく、富士も昨日に見かはして、け高く見せる保を、うつすや田子の浦人の、聲面白く一同に、富士の白雪朝日で解る、娘島田は寐て解く帶の、しんから底から、戀にや夜も日も明ぬ物じやとナ、サアサ可愛さが增はいな、梅の莟と戀しの文は、ひらく間を待兼山の、眞實誓文色にやうき身を、つくす物じやとナ、サアサ可愛さが增はいな、諷ひ連たる友烏、塒に歸る夕闇の、空に輝く星月夜、鎌倉さして三重

師直屋敷裏門

實に松柏の年寒く、操屈せぬ寺岡が、忠義に略す燒鳥の、身過渡世にあだ涙の、夜る〳〵窺ふ師直が、裏門口に立留り、詞「ホ是は大分雪がちら付て來たはい、ヲヽ寒む〳〵、是は又寒い事では有るぞ、誠に今日は極月十二日、此鎌倉へ來て最う二タ月、今宵も大かた九ッ過ぎ、燒鳥〳〵、御存じの味い物屋でござります、燒鳥〳〵、御存じの味い物屋でござります、燒鳥〳〵、モウ家中は寐たか、マア今宵も氣遣ひはない、ドリヤ逝ふかと提手桶、提て向ふへ行過る、後の方に聲有て、詞「義政〳〵と、いふに寺岡胸にぎつくり、つか〳〵と立寄て、詞「ムウ我本名を呼は。寺岡平右衛門身共じやはい。ヤア大星樣。コリヤ、此屋敷の邊り、斯の如く非人と迄、姿をやつし徘徊するも。ハヽア拙者迚も商人と成、晝は勿論夜に入ては心元なく、商ひに事寄、家中の寐入迄は。ホヽウ出かした平右衛門、嚴冬素雪も厭はぬ忠節、嘸亡君にも御滿足。ア、イヤ私よりはお前樣、道中の勞れもお厭ひ遊ばされず、非人と迄お姿を。サ是も冥途へ御奉公、斯計心を盡すも、無念凝たる我々か魂。亡君の仇一刻も早く。サ首かき切つて恨みを晴さん、今日は十二日、來る十四日には御菩提所光明寺にて參會遂げ、サ其夜の密事を。シラお手當の荷物萬事は。サ追々到着、此義は其方へ申付る、着船次第諸士の旅宿へ。ハア畏り入ました。其方に對面遂て我も安堵、最早旅宿へ立歸らん、其方も早く〳〵。ハア、ガ夜も更ましたれば、お旅宿迄お見送り。イヤ〳〵夫は無用。ヂやと申して、本望遂する迄は御太切なる大星樣。何

さ〳〵、忠義に重い輕いはないサ、そち迚も同じ身分、早く歸つて休息仕やれ。デモ。ハテ扨、師直が首見る迄は、某が身は金鐵、氣遣ひ仕やるな。ハア左樣ならば。さらばと計大星は、旅宿をさして立歸る、跡打見やり平右衛門、詞「ア、いかい御苦勞遊ばすなア、と思はず涙はら〳〵と、汲取跡に疾よりも、忍び立聞門番が、曲者やらぬと腰刀、拔てかゝるを引廻し、刀たくつて其儘に、脇腹ぐつととゞめの刀、脆くも息は絶にけり、用心嚴しき門内の、間近く響く柝木に、傍り見廻し、詞「燒鳥や燒鳥、夜半に紛れて三重「立歸る

勢ぞろへ

柔能く剛を制し、弱能く强を制するとは、張良が石公に傳へし秘法なり、鹽冶判官高定の家臣、大星由良之助是を守つて、既に一味の勇士四十餘騎、獵船に取乘て、笘深々と稻村が崎の油斷を賴にて、岸の岩根に漕寄て、先づ一番に打上るは、大星由良之助義金、二番目は原鄕右衞門、第三番目は大星力彌、跡に續て竹森喜多八、片山源太、先手跡船段々に、列を亂さず立出る、奥山孫七須田五郎、着たる羽織の合印、いろはにほへとゝ立並ぶ、勝田早見遠の森、音に聞へし片山源五、大鷲文吾かけ矢の大槌引さげ〳〵、詞「吉田岡崎ちりぬるを、わか手は小寺立川甚兵衛、不破前原深川彌次郎、得たる半弓手挾んで、上るは川瀨忠太夫、空に輝く大星瀨平、よ

たれそつねらなむうゐの、奥村岡野小寺が嫡子、中村矢島牧平賀、やまけふこえて朝霧の、立ならびたる蘆野や菅野、詞「千葉に村松村橋傳治、鹽田赤根は長刀搆へ、中にも礒川十文字、遠松杉野三村の次郎、木村は用意の繼梯子、千崎彌五郎堀井の彌惣、同じく彌九郎、遊所の遊びにゑひもせず、由良之助が智略にて、八尺計の大竹に、弦をかけてぞ持たりける、後陣は矢間十太郎、遙跡より寺岡が、伴ふ二代の早野勘平、假名實名袖印、其數四十七人なり、鎖袴に黑羽織、忠義の胸當打揃ふ、實に忠臣の假名手本、義心の手本義平が家名、天と川との合詞、点るな兼ての言合せ、矢間千崎小寺の面々、躬力彌を始とし、表門より入れ〳〵〳〵、鄕右衞門と某は、裏門より込入て、相圖の笛を吹ならば、時分はよしと乘込よ、取べき首は只一ッと、由良之助に下知せられ、怒りの眼一時に、館をはるかに睨み付、裏と表へ別れ行

敵討

既に其夜もふん〳〵と、闇に一ばい黑どり奴、挑灯引提いつきせき、來かゝる跡より寺岡が、付るとゑらず師直が、表の門口打たゝけば、内より答へる寐ぼれ聲、どなたでござる、藥師寺次郎左衞門家來、旦那のお迎ひ、門をお開き下さりませう、是は御苦勞と、言後より挑灯ばつたり眞の當、うんと其儘忍たへたり、物音聞付門番が、狼藉者と立かゝるを、心得たりと平右

衛門、引かづいてどうと投付、縛りからむる其所へ、諸士ばら〳〵と立出て、詞「首尾は、シイこいつに手引させ、いづれもお入なされ、出來た〳〵と一同に、門内さして三重「迯惑ふ、北隣は仁が軍慮の如く、鬨を作つて攻入ば、寐耳に水の一家中、あはてふためき三重「忍び入る、大星木播磨守、南隣は石堂右馬之丞、兩隣より何事かと、屋敷の屋根に侍共、挑灯高くさし上て、詞「ヤア〳〵お屋敷騒動の聲、太刀音矢叫び事騒しく、狼藉者か盗賊か、御加勢致せよと、主人右馬之丞、主人播磨守、申付ましてござる、イヤ我々は鹽冶判官が家來の者共、主君の仇を報はん爲、四十餘人の者共、今宵夜討に推參致した、御隣家に恨もござらず、火の用心萬端凶事はござりませぬ、併御加勢とござらば、是非に及ばず、一矢仕りませふかな、御神妙〳〵、主人へ此由申達しませふ、挑灯引けと一時に、鎮り返つて控へける、一時計の戰ひに、寄手は纔二三人、薄手負たる計にて、敵の手負は數知れず、忠義の刃鐵に切立られ、皆ちり〳〵と迯失たり、あなたの庭より二代の勘平、藥師寺と切結び、秘術を盡す奇代の働き、死靈の力添るとは、知らぬ藥師寺侮つて、刀からりと打落され、南無三寶と迯行を、飛かゝつて大袈裟切に打放し、勇進んで駈り行、寢所の内には師直が、胸に覺の絶躰絶命、樣子猶豫ふ其所へ、命から〳〵伴内が、詞「申し〳〵御前樣〳〵、コリヤどうしませう〳〵〳〵、おど〳〵震ひ居たりける、詞「サアよいてや〳〵。ぞやと申して是が落付て居られませうか。よいてや、コリヤ是へ參れ。

ハア。參れと言ふに。ハア、とさし寄伴内が、衿かみ掴んでぐつと引寄、首かき切て傍に投捨、詞「生置ては眼前の妨げ、此上は片時も早く、そうじや〳〵と一人笑、兼てきつらふ二重壁、袋棚へと忍び入る、斯共知らず一味の義士、次第〳〵に込入て、抜足差足窺ひ見て、天。川。シテ師直が寢所はな、則ち此一間、それと皆々寢所へかけ上り、ヤア師直は最早迯延たか。イヤ〳〵何れも、一腰も是に有、殊に夜着蒲團の暖まり、此寒夜にさめざるは、迯て間なしと覺たり、今一應御吟味、御尤と、猶奥深く尋ね行、空物凄き夜嵐に、連て降來る大雪を、押分かき分柴部屋より、ぬつと出たる大男、威有て猛き其骨柄、夫と見るより一味の諸士、扨こそ師直ござんなれと、左右より追取巻、打てかゝれば抜合せ、爰をせんどゝ戰ひしが、義を金鐵の刃先には、何かは以てたまるべき、其まゝ息は絶にけり、引起しとつくと見れば、詞「ヱ、こいつ醫者だそふな、馬鹿〳〵しいと、一同に、打笑ふたる其所へ、馳集つたる諸士の面々、詞「座敷のくま〳〵尋廻れど、師直らしき者もおりませぬ、スリヤ取迯せしな、師直を討取んと、年月心を碎きしも、やみ〳〵と打洩せしか、ヱ、口惜や、最早運盡たる我々なれば、此所にて切腹仕らん、誠にいざと銘々が、差添に手をかくれど、いつかな鯉口動かばこそ、コハ〳〵ふしぎと劃れ入る、後にあり〳〵勘平が、死靈を夫と大星聲かけ、詞「ヤレ早まるまい、勘平が幽魂切腹をとゞめしは、師直いまだ屋敷の中に、屈み居るに極まつたり、いづれもソレ、ハア、はつと計

に打連て、奥座敷へと駈り行、幾間數、隔て〳〵し奥座敷、あかりを照す蠟燭に、蟻の這出る所もなし、斯て大星由良之助、原郷右衛門、其外の義士の銘々、追々に馳集り、座敷のくま〳〵見渡せば、壁にさしたる蠟燭の、おのれと動くに、大星は、脇目もふらずきつと眼を付、詞「ハテ怪しや、今は寒夜の時節、此壁の暖まりと云ひ、此蠟燭自然と動くは、何にもせよ二重壁と、聞より力彌は飛掛り、鑓引しごいてつゝ込ば、あたゝる血汐、扨こそ〳〵、平右衛門打碎け、ハッと答へて勢ひ込、かけ矢をもつて打碎けば、顯れ出たる高の師直、皆飛掛るを、大星制し、禮義を正し打向ひ、詞「我々は鹽冶が家臣、斯御舘へ亂入せしも、亡君の仇を報ぜん爲、速かに御首を給はるべしと、兩手を突き、謹んで述ければ、師直ちつとも悪びれず、詞「ヲ、神妙〳〵、汝等が忠義に免じ、某が首を只今得させんと、透を窺ひ扳討に、大星目がけ切付るを、かい屈つて腕首をあつかと取らへ、詞「ホゝあほらしき御手向ひ、サァいづれも、日頃の鬱憤此時と、由良之助が初太刀にて、四十餘人が聲々に、浮木に逢へる盲龜は是、三千年の優曇華の、花を見たりや嬉しやと、ずた〳〵に切付〳〵、踊上り飛上り、悦び涙に暮居たる、由良之助は亡君の、腹切刀取出し、師直が首搔切、詞「是より直に御菩提所、光明寺へ立越て、御墓に首を備へんと、打連立か弓取の、忠義の譽末代に、武士の鑑と輝きし、双葉の榮今正に、忠臣藏の丁ばし、を、新に綴る新芝居、繁昌類ひあら金の、土も艸木も動きなき、御代を壽き奏でけり

寛政十戊午歳八月十五日

風雅でなし酒落でなし

忠臣一力祇園曙　終

忠臣後日噺

雲無心にして岫より出るとかや、雲州鹽冶家の舊臣、大星由良之助良金、同苗力彌、其外四十餘人の義士、怨敵師直が館へ取かけ、思ひの儘に仇を復し、菩提所光明寺に引取て、首級を手向燒香も、列嚴重に執行ひ、皆客殿に居流れて、前夜の勞を晴させんと、山門に酒を許し、院主の馳走答拜も、二字を尊む忠臣の、譽とこそは知られたり、良金座席を見廻して、詞「ナニ富堀殿大鷲殿、貴殿方には兼てより、誹諧を好るゝと承はり及んだが、今朝途中の御發句は、時に取ての御秀逸、ァ、面白う承はる、拙者も下手の横好と、折々吐ても見まするが、何として及ばぬ〳〵、ァ何とやらでござつたの、御苦勞なれ共今一應、吟じてお聞せなされぬか、死後迄の後學ぞと、望かけられ兩人は、詞「コハ大星殿御挨拶、御覽も耻入候へ共、只有躰を申た計、御添削下さるべしと、認め持し兩睦を、扇子に乘せて差置ば、押戴いて手に取上、詞「寒鳥の身はむしらるゝ行衛かな、又こなたはと押披き、詞「山を拔く力も折て松の雪、ハァ、何れをいづれと申されぬ當意即妙、甚感心仕る、ヤイ〳〵力彌、夕べに道を聞て、朝に死す共可なりとは、聖賢の詞、汝も後學仕れと、父が詞にすり寄て、若輩の私、存ぜざる事ながら、面白さうに存じます、苦しからずば兩詠共、下されかしと挨拶も、育柄こそ奥床し、折から寺僧走り出、

詞「藥師寺治郎左衛門殿、上使と有て御出と、詞も未終らぬ内、頬も心も憎てい作り、並居る諸士に禮義もせず、上座へ通り肘張かけ、詞「ヤァ鹽冶崩れの主なし共、謹で承はれ、當時國家の政道を主る、師直公を討取る條言語道斷、又、故有て預置れし天國の短刀、前夜の騷動にて紛失、畢竟敵討は附たり、盜賊同然の所爲なりと、殿中にて評定極り、殘らず召捕禁獄させよと、以の外の嚴命なれど、ァ夫も不便な事、爰は拙者が了簡にて、切腹申付る間、サァ尋常に腹を切れ、サァ腹々々と詰掛て、家來も庭に取卷たり、詞「ヤァ〳〵藥師寺殿暫くと、詞をかけて打通る、桃の井若狹之助保明、仁義を守る弓取の、故實を正す上使の式禮、上座へ通れば一同に、諸士も頭を下にける、詞「イヤ何藥師寺殿、此桃の井へ仰付られし義士の御預、直義公の仰を背き、拔がけして先へ廻り、やらぬ遁さぬとおいやるは、エ、聞へた、亡び失ても師直へ、例のお髭の塵取侍、そう味ふは得致すまい、察する所討死共、行衛しれざる師泰が、彼天國を取隱し、渠等に汚名を打かぶせ、此場で切腹さす分別、ハテよう出來た貴殿の御作意、夫は兎も有れ拙者が役目、餘人にさせては武士道立ず、定めて覺悟も有つらん、サァ拔放せ藥師寺と、反打かけて詰寄れば、詞「ァゝこれ〳〵〳〵桃の井殿、去迚は短氣千萬、全くそうした心でない、と申すは、貴前の妹御千種殿を、兼て拙者が婦妻にと、直義公へも願ふて置たりや、其元は兄舅、親同然に存るから、此度の御大役、何がな手助け致さふと、申さば貴殿へ孝行ぶ

り、コレサ是兄員公、まつぴら此事御沙汰なしに、サア御容赦に預りたい。ム、然らば拙者をおかばひ有て。成程左樣。ハテ扨入らざる御深切と苦笑ひ、差控へたる大星は、桃の井に打向ひ、詞「拙者を初め徒黨の者、亡主が仇を討取て、最早此世に念慮もなければ、碑前の殉死御赦免と、思ひ入てぞ願ひける、詞「ホテ、尤の願ひなれ共、最前より聞るゝ通り、天國の短刀折悪敷紛失故、右詮議落着迄、某方へお預け仰付られたれば、心置なく滯留有、用事も有らば家來迄、何時も承はらん、かゝる冥加の侍を、預り歸る身の面目、末代迄の家名の譽れ、イザ同道と夕附日、顔に照添ふ藥師寺は、面目灰に紛れ武士、三國無双の忠臣を、預り歸る桃の井は、實に優才の家柄や、義士の譽れは萬天に、星の光りも赫々と、眠りの夢は覺にけり、石部草津を横田川、通りも稀な子の刻過、渡し舟さへ寐入端、頃しも臘月末つかた、四方の雪風どう〳〵と、風が風吹く風玉に、吹倒すかと渉し番、弦引廻す要害も、吹破られて冷上り、ふつと目覺す渡し守、筵刎退かけ出しが、詞「ホイ今のは夢で有たよな、所は鎌倉の光明寺、鹽冶家の忠臣達、敵師直討取て、靈前に首を手向、客殿に休息の所へ、藥師寺めが無實の難題、夫に引かへ桃の井樣、右詮議落着迄、義士の面々預かると、花も實も有る取捌き、ヱ、其跡はどうで有うぞ、あつたら夢を破つた事、是といふも天川や義平殿、此杵八が心を見込、買物萬事の相談相手、敵討の濟迄は、態と住所も定めずに、日雇賃搗渡し守、いろ〳〵に姿をやつすも、どうぞ

此事隱密に、義士に本望遂さしたいと、思ふ一途の空夢か、何にもせよ能吉左右、ヱ正夢で有てくれかしと、天を拜して忙然と、瑞夢を願ふ其所へ、石部の方から韋駄天走り、小番〳〵と呼かけて、間近く飛くる挑燈の、矢よりも早く飛乘る船、詞「ヱ、どめつそふなお侍、船の底が抜ますわいの。ヲ、是は無調法、餘まり急な御用だから、思はず知ず今のどつさり、サア〳〵早うやつてくれろさ。ァイやるはやりやんしよが、私も今迄一寐入、目覺しに一ぷく飲たい、がお前も急ぐと言んす程に、向ひ迄着内に、火を打て借て下んせ。イヤ打いでも此挑燈。ハテ扨此ゑら風に、挑燈疊むと灯が消ると、械つゝぱつて押出せば、夫もそうかと船梁に、腰打かけて銃卵捜し、ほくちが切たと懷中の、紙入出して用意の袋、取出す拍子落した物、知でかち〳〵火を移し、咥へ煙管の船頭が、詞「ナント親方、きつう急ぎのお飛脚そうなが、何ぞ又鎌倉に、變つた事でも有たかいと、うら問かゝる着かゝる、ソレぐはつたりじやといふ中に、飛上つたる侍は、過分といふてかけ出す、詞「ヱ、行は〳〵、ラモ扨も早い足、ホンノ蜘の子散す樣な、コレハ恙たり、吸がらを飛して退けた、爰で我等が嗜の、大坂天滿天神の御社内、明珍が火燧、ベタクリ〳〵〳〵舟底に、屆んで打たる石の火に、光るは何じやと拾ひ上、見れば覺の金の短冊、星の光りに透しても、字性朧に讀兼るを、火皿につき付讀下せば、詞「雲州鹽冶の家士、寺岡平右衛門、裏はいろはの合印、そんなら今の侍が、寺岡殿で有たかい、何でもぼ

つ付様子をと、足に任せて三重「行空の、風雅でもなく洒落でもなく、しやう事なしの山科と、世に颯はれし涙人の、奉公拵と披露して、鎌倉下向の留主住居、敵に歌賃の正月拵へ、妻のお石に引添ふて、嫁の小涙もかいしよげに、襷前垂引しめて、仕馴ぬ業も姑の、詞をもちゐの鏡餅、雑煮の温氣取並べ、跡は餅花咲柳、家内嘆き賑はへり、詞「イヤなう小涙、闇しさに取紛れて、戸難瀬様の御隠居所へ、使上るをとんと忘れた、りんでも早うやつてたも。アイかゝ様も最前から、お出成れて勝手の手傳ひ、私が初めての正月、馴子舞と望まれても、あられもないそんな事と、爰へ逃て参じましたが、其詫言の酒盛かな、相人になつて居やしやんしよと、言て居る中勝手から、火斗の底銅盥、ちやん〳〵ぐはん〳〵囃子立、詞「馴子舞を見さいな〳〵、客といふ其名は有れど一家同士、戸難瀬が機嫌、若紫のほうろく頭巾、長羽織、梅花鮫取て摑佩、歌舞妓役者の丹前姿、あづま訛りも相應な、詞「コレハ都見物左衛門と申者でおりやる、今日は東山の櫻狩、天氣もよければいざ去らば、花を見しやらば音羽の山よ、瀧の白糸、ぢよん〳〵女郎が彈三味線に、乗てうかれてすとんとどつこい〳〵、すとんと〳〵、ハツハよいかさ、咲た〳〵と餅花に、戯れ寄し品形、四十は遙遠山櫻、ながめに飽ぬ風情なり、奴參れ、ナァイ〳〵〳〵、賃搗の杵八が、紺のだいなし釘ぬき紋、供脇指のしか物作り、紫竹の杖にあは草履、振出す腕寒紅梅の、ずつと氣條の芳しき、男一疋端手奴、生蛸摑んでてつべいから、

かゝとう迄は旦那の物だ、御用いかゝでではりまらすでではりまらすと蹲踞ば、家内がどつと譽る聲、お石も興に入めなる、小涙獨が笑止がり、詞「ヲヽかゝさんとした事が、ついに覺えぬ亂れ様、誰が強ふ盛たぞいと、お石が手前耻らへば、詞「ヲヽ、堅、あもつきの御祝儀、お定りの馴子舞、そなたの名代を、母の私が勤たのが何とした、谷の細道幾つも見へる、ホヽヽヽ面白い〳〵と、酒がほたへる馴子舞、舞はまはひで千鳥足、仁躰捨し醉狂ひ、お石もおかしさ嫌の、貰ひ機嫌の挨拶振、詞「戸難瀬様のおつしやる通り、夫親子が奉公かせぎ、留守事兼し今日なれば、賑々しいのは先吉左右、年月願ふた有つきも、嘸本望でござりましよと、ぎえん祝ひし詞の謎、杵八も追從口、詞「旦那のお首尾もよござりませうが、戸難瀬様の今の所作事、鯉長慶子もそこ退け〳〵、コリヤ杵八殿の御挨拶、こなたの奴丹前を、譽させうでの壁訴訟、ナアお石様、イヤ又見事でござりました、是は術ない座に堪らぬ、どりや御勝手で跡蒸籠、千歳樂と搗あげて、善哉祝ふて歸りましよと、臺所へぞ逃て行、戸難瀬は行義改めて、詞「心に思はぬ戯言も、聖殿親子の鎌倉下向、敵討と思はさぬ世間への補ひ、御本望を遂られた、慥な便りの有迄は、隨分此事をけどられぬのが肝心と、言にお石も打點頭、詞「左様でござりまする共、敵に油斷さす計略と、咄し半へいつきせき、旅裝束を其儘に、入來る足輕平右衛門、斯と見るより懐中より、狀箱取出し差置ば、詞「ヤア寺岡殿、マア挨拶は跡の事、夫々が自筆狀、封押切て

讀中も、詞「コレ申し戸難瀬様、彌々噂に違ひもなう、本望遂たといふ文躰、ヱ、有難い忝ないと、天を拜し地を禮し、悦び勇む二人より、嬉し悲しき露涙、袖に小涙が心根を、思ひ遣つゝ寺岡も、差俯いて居たりしが、詞「平右衛門めが都歸り、委しくお咄し申したけれど、外々の御狀も有る、瑞松院にござなさるゝ、後室様への急御用、心もせけばお暇と、急ぎてこそは出て行、跡打眺め三人は、互に恥て得も言ぬ、心は同じ夫や子の、兼て覺悟は聞ながら、過し別れを今生の、別れと思ひ出されて、涙も同じ涙なり、詞「譜代相恩のお主の敵、討課せた人々は、無悦びでござりませうが、跡に殘つた妻子恩愛、いづれ愚も有るまい物、我々計か何ぞの様に、未練そうに何泣事、本望お遂なされたる、惜な便り聞上は、世間も何も最う構はぬ、亡君はじめ義士達へ、手向の香花經陀羅尼、詞「ヲヽ、夫々、是程冥加な人々へ、涙こぼすは不吉といふ者、サァ御一所に佛間へと、打連チクリ「てこそ入にけり、折から表へ來かゝる侍、麻上下の糊味も、しやき張返る頬搆へ、古傍輩の住家とは、知ても知ぬ表向、供の汉がいかつげに、誰ぞ頼まふ、頼みませうといふ聲に、襟はづして飛で出る、昔の奏者今のりん、どうれといふもつかふどなる、詞「フヽム大星殿のお宅は是じやな、主人藥師寺殿よりお使者、御存じの進道源四郎、お石殿へ直談と、申通じておくりやれと、聞分がたき口上を、こまつた顔で奥に入る、取散す物片付させ、加古川が後家戸難瀬は出迎ひ、詞「お使者お通り下されませと、詞について

のつし〳〵、上座へ通る顔形、憎さも憎しと詞にかど、詞「主由良之助が女房嫁、在宿は致せ共、お使者のお名が氣に入ぬ、進道源四郎殿といふ、未練不忠の犬侍、同席するは其身の穢れ、幸ひ參り合せたる、畑の此戸難瀬、よきにあしらひぼつ歸せと、頼まれての此時宜、サァ口上を承はらうと、ずつかり言れてさしもの進道、眞面目になれど痿まぬ高聲、詞「ヤァ奇怪なるお石が行跡、當時藥師寺殿の使者と有れば、何は兎も有れ出合ふ筈、ヱヽ聞へた、大方こつちの推量の通り、事にかこ付出合ぬも合點たり、コリヤやい、使者といふたは女原、驚かすまい爲計、誠は足利直義公より嚴命、ナント肝が挫るか、其嚴命の子細といつぱ、去ぬる夜由良之助始め四十六人の者共、執事職の館へ押かけ、師直を討取さへ有るに、預け置れし天國の短刀、其騒動にて行方しれず、敵討は付たりにて、盗賊同然の所爲言語道斷、急度罪科有べきながら、又其節より子息師泰、討死共出奔共明白ならねば、是以て御疑ひが掛つて有るはさ、復讐徒黨の者共は、右御詮議相濟迄、桃井若狹之助へお預け、天下に名高き天國なれば、盗取て所持もなるまい、大方は妻子が飯料、此山科の隱れ家へ、送り越たに紛れは有まい、行向つて詮議せよと、某を差越れた、サァ有様に白狀せいと、義士の所爲と天國を、落し付たる詞の末、聞ぬ戸難瀬は膝立直し、詞「唐天竺は申すに及ばず、此の日の本の神代より、聞も及ばぬ忠臣義士、よもやとは思へ共、私ならぬお上の仰、申聞せも致さふが、イヤコレ源四郎殿、ヱヽ、こな様は〳〵、

どういふ天魔が入かはつて、そんな比興な侍には、どうして成て下さんしたぞいのう、鎌倉と雲州とは、遙の道は隔ても、一腹一生の兄弟、死しやんした本藏殿の言しやるには、そちが兄の進道は、勇氣といひ智謀といひ、適な侍、主君の仇を報ん者、大星に續いては源四郎なりと聞た時の其嬉しさ、夫に引かへ今日の此首尾、臆病至極の身をもつて、古傍輩の此内へ、こんな使にようござつたのう、いつその事最初から、斧九太夫や沖野將監達の樣に、尾を振て逃たがよい、敵討の一部始終、相談密事の座に連り、十の梯子の九ッ目、逃るのみか敵の餘類、藥師寺に奉公する、古今に稀なる大腰抜、お石樣や娘にも、私は顏が合されぬ、詞「兄と一ッでない言譯、こつちから勘當した、斯いふが無念なら、腹切て死で下され、兄弟の好みには、介錯してまんぜうと、いへ共こなたは見向もせず、板天神程着飾つた、形も衣紋も引しやなぐり、喰付程に思へ共、遺に頭蹈へたる、兄といふ字に押へられ、下さげにだにも言兼て、恨み涙ぞ道理なり、詞「ヲヽハヽヽヽヽ、女のざいにはざいたりな、コリヤやい、主君の敵を討てからが、腹切て死ねばならぬ、アッア否やの〳〵、死で花實が咲物か、生て居りやこそはし折かゞみ、兄弟廻り逢たでないか、夫は扨置拙者が役目、お石親子に逢ねば濟ぬ、劔のありかも家捜しと、立上るをならぬ〳〵、詞「最前からもいふ通り、現在兄の源四郎殿に、家捜しさせては義理立ず、ヤア立ても立いでも、役目を捨て歸らふか、邪魔ひろぐなと引退ても、どつこいそうはと袴の

裾、引ぱるはづみにべり〳〵〳〵、切てちぎれてこなたに留り、源四郎は一間の襖、ぐはらりと明ればコハいかに、上檀かまへし中央には、亡君の御位牌、左右の脇は大星親子、其他四十餘人の面々、俗名書たる有樣は、さながら在すが如くなり、未練不忠の進道も、思はずハヽヽ、はつと跡ずさり、色青ざめて膝ふるひ、次の一間へ逃行を、跡を慕ふて戸難瀨も倶に、追かけてこそ入にけり、妻乞ふる、牡鹿の聲はかへろうと、紅葉蹈分啼物を、立歸り來ぬ妹と脅の、力彌が事のみ戀こがれ、小涙は奥より忍び出、ぢほれながらに一間なる、靈前に手を合せ、涙さめ〳〵歎きしが、人や見んかと娘氣の、心を奥と日の間の、障子襖も指足に、そろ〳〵戻り我夫の、位牌をそつと取下し、前に居置小聲にて、詞「力彌樣、久しうお目にかゝりませぬ、ヱヽ、儘ならぬ浮世の中、天にも地にもない殿御、持たといふは名計て、玉椿の八千代迄を、たつた一夜に短い別れ、けふの便りの有迄は、どうぞしてお主の敵、首尾よう討て下さんせと、詞「神樣や佛樣を、祈る心を精力に、諦めて居ましたが、追付腹切相果る、母へ孝行賴入る、思へば短い契で有たと、人に泣す事ばつかり、細々書て下さんした、なんの目出度〳〵しな事、此お文から一入に、戀しうて〳〵、どうも斯もならぬ樣になつたはいなァ〳〵、こんな事ならお主の敵、討しやんせぬがましじや物、詞「ァヽ、勿躰ない殿樣、御赦されて下されませ、憎いやつじやと鼻御樣も、必呵つて下さりますな、詞「其外の旁も、粹を通して下さんせ、餘まり夫を

戀慕ひ、つい申したのでござりまする、不便な事じやとお前方は、そちら向て居て下さんせ、又我夫も我夫じや、首尾よふ敵を討課せ、欠落しては下さんせぬ、十五や六で歴々の、傅御衆と同じ樣に、腹切いでも大事ない、お前計は世の人が、未練者じやと笑やせぬ、私計か太切な、母御樣も有事なり、そう無義道にはせぬがよい、詞「かういふて居る内も、若腹切はなされまいか、そんな便りが有たなら、私しやうどせうぞいのう〳〵、責て道理じや尤じやと、なぜ物いふて下さんせぬ、コレ、我夫と押動かし、傍なる人にいふ如く、肌に引きめ抱寄て、娘心のあどなくも、泣てかこつこそ哀なり、勝手口より杵八が、風呂敷包せたら負ひ、一腰しやんと旅用意、小涙が手を取り無理無躰、物をも言ず引立るを、振放して逃退帶際、引戻して、詞「コレおむす、折々おれが爰へ來るのは、疾うから惚て居る故じや、イヤモさつきにから聞て居れば、追付腹切夫を慕ひ、あのゝ物のと獨言、可愛らしうて〳〵、思ひが増てどうもならぬ、シタガ是よう物を合點さつしやれ、死で仕廻ふ夫を慕ふは、くはんもつに有る蠣を取ふと、がすのつん握つて居る樣な物じや、じたい前髪と色事は、面白ふない物じやげな、幸ひ惚て居る此杵じや、思ひ直して女夫にならしやれ、味いがの〳〵、おうとさへ言や爰から直に、二人連でついと鎌倉、手を引合て道行じや、まだ〳〵見せる物が有ると、風呂敷明て取出すは、見覺えの有る尺八裝束、詞「ム、こりや是鼻大星樣の、サア〳〵サ、泉州堺の天河屋で、囉ふて置た其心は、こなた衆の身の上を引掛て世話せふと、心の割符の此裝束、フ、ム、そういふこなたの本名は、ホヲ疑ひも尤と、有合尺八取上て、白地には得言ねど、歌の唱歌にあり〳〵と、我身の上を吹分て　唄「此花と、涙花の事を、春告草に、ましらせまほしや白梅の我は野梅と、捨られて咲夜の梅、闇はあやなし色こそ見へね、香やは隱るゝ花の兄、詞「我は野梅と捨てられて、香やは隱るゝ花の兄、我は野梅、香やは隱るゝ花の兄、詞「不義者見付た動くまいぞ、躬力彌が名代に、此母が去た〳〵、エ、と惚りかけか、そりやあたまから覺悟のまへ、サアそんなら是を着替てと、身拵へさす折からに、後の襖さつと明け、詞「不義者見付た動くまいぞ、躬力彌が名代に、此母が去た〳〵、エ、と惚りかけ寄るを、突戻して、詞「コレ小涙、去てしまへばあかの他人、くさり合たアノ杵八と連立て、一時も早う鎌倉へ、ア、夫も構はぬ事、姑去の暇の去るし、ソレ受取りやと投やる包、心隔の唐紙も、はたとふさがる娘氣に、當惑涙せきあへぬ、詞「エ、めろ〳〵と何泣事、樣子は是にと帛紗の包、解て見れば、詞「路用と書し金子の包、コレ〳〵〳〵、お石樣にもこなたをば、鎌倉へやりたい心、此杵八が思案の通り、大星殿親子の思はく、他人が逢に遠慮はないと、心を込し暇の印、そんなら姑御にも御合點で、ヘエ、有難ふござりますと、いふては拜み拜みては、跡にも心引るれど、東の空の戀しさに、先へも足の急がれて、又の便りは雁の傳、其音信を松の門、打連出んとする所に、詞「ヤア〳〵兩人何國へ行、詮議有と源四郎、障子蹴放しつゝ立ば、

戸難瀬は手鑓引そばめ、詞「娘小浪が鎌倉へ、出立の餞別に、犬侍の進道殿、叔父御の首を土産にさすと、突てかゝれば身をかはし、鬢首掴んで柄をしごき、叩き落せばからりつと、鑓は小庭へ落散たり、コレはと驚く戸難瀬が懼、ばらりずんと切下れば、ノウ悲しやと駙寄小浪、お石もあはて轉び出、俱に劬り介抱の、心遣ひぞわりなけれ、詞「コレ〳〵御兩人、隨分手負を介抱有れ、爰は我等が受取たと、手早にかけたる玉襷、落たる鎗を追取のべ、ヤア〳〵源四郎、詞「不忠未練の汝が命、裟婆の暇を取せんと、下段に構へくり出す鑓、そつくひ付にかつきと留め、詞「コリヤ毛二才めが味をやる、儕も命がねぐさつたと、てうど拂へば又付込、獅子の洞入虎亂入、互に劍術鎗術の、手練と手練が入亂れ、暫し勝負も見へざりしが、運の極めか進道が、敷居に躓き漂ふ所、弓手へ通れと突留られ、うんと計にかつぱと伏す、詞「ホヲ、遁なる今の働き、殊に相手は誰有ふ、劍術無双の進道を、手の下に突留たは、義理有る母が敵討、加古川源藏行安と、知たはさつきの笛の音色、色も香も有る武士なれば、父御にかはつて勘當赦す、ハヽ、ハヽはつと源藏は、鑓投捨て蹲る、詞「ヲ、嬉しいも理りぞや、過行れし夫本藏、常々の物語、小浪が兄に源藏迚、男子一人有たれど、殿樣御幼年の其昔、御伽役に召出され、いか成事にや御機嫌損じ、もつての外の御怒り、主命是非なく勘當せしが、御成人に隨ふて、殿にも麁忽を悔ませ給ひ、在所方々尋れ共、風の便りも聞へぬは、どこに狼狽居る事ぞと、涙ながらの御

しを聞て、案じた此年月、よう無事で居て下さつた、今の健氣を見るからは、父御前の勘當は、未來でわしがよい樣に、お詫を申す其代り、一時も早う小浪を伴ひ、力彌殿に逢して下され、まだ其上の賴には、桃の井樣へ歸參して、何卒二代の本藏と、言れて下され源藏殿、夫で先祖へ功も立つ、草葉の陰の我夫も、嘸滿足でござらふと、深手も屈せぬ敎訓は、眞實眞身の親よりも源藏が身に有餘る、詞の限り盡しても、飽たりがたき大恩と、有難涙に咽びしが、詞「ノウ母人、今日の只今迄、御勘當の身を憚り、存じながら終に一度、御孝行も致さぬに、親父樣に成かはり、勘當御免下されます、御恩を送る事さへも、泣て返らぬ必死の深手、よく〳〵に私めは、親に緣なき不孝者、十二や三で勘當受し、其親人の最期も知ず、義理有る母のお前に迄、逢て別るゝ心の本意なさ、御推量下されと、兄が歎けば妹も、爺樣といひお前に別れ、賴に思ふ眞君、契り初たる夫さへも、翌をも知らぬ命とは、どうした因果な產れ性、果報拙き此身やと、消入絕入泣沈む、心を察しはら〳〵、涙をふきの姑も、雨に打るゝ風情なり、泣目を拂ひ源藏突立、詞「かゝる歎きも源四郎、イデ首取んと切付るを、刀追取丁と受け、詞「ヘエ、無念口惜やなァ、返り討にと思ひしに、運盡て此有樣、せめて最期に恨の切先、受取れやつと打たる手裏劍、目當違ふて見付の柱、はらりと掛る姿繪は、コリヤ是師泰が人相書、ハヽ、藥師寺が京屋敷に、忍び居るこそ幸なれ、術を以て天國の短刀、奪ひ取て足利家へ差上、義士の汚

名を雪がれよと、心を籠し此書添、ヘエ、忝いと戴く石、源四郎は突込鎧、我と我手に鹽首握り、ぐつと一突肩口へ、穗先は朱に死でけり、詞「フ、ム合點行ざる叔父が行跡、大惡人共善人共。ヲ、其事を知たる者は、三千世界に夫に此石、源四郎殿の存生に、いふては却て本心に、違ふ道理と差控へし、譯は爰にと懷中より、取出し見する夫が書狀、源藏取て押披き、詞「何々追て申入候、敵師直屋敷へ夜討に入んと申合せの會合相濟、跡に殘るは進道源四郎、宵より申合せし通り、手配り致し候はゞ、仕損じ申事有べからず候へ共、敵ながらも高の師直、いかなる妙計あらんも知れず、萬が一討洩さば、各立腹せんより外致方無之間、何卒貴殿衆にはづれ、臆病至極の名を取て、敵方へ油斷させ、始終の仇を討取給へ、さすれば兩方全き計略、此義如何にとのつ引ならず、密事の密事を賴みし所、元來冥理は好まぬ男、汚名を取て忠義を思ふ、日本無双の源四郎と、笑ふて其場を立別れ、我は敵を討課せ、名を萬天に上れ共、誠忠義の功しは、進道氏に候間、此事宜しく瑞松院の後室へ、仰上られ然るべく候、お石殿へ、由良之助、そんなら叔父の進道殿は、古今獨歩の大忠臣、ヲ、此狀が極めの證文、後室樣に御覽に入んと、詞も花の所緣有る、紫野の瑞松院、追加の文と名に呼は、コレ大星が筆跡なり、始めて聞たる戸難瀨が仰天、詞「ヤァそんなら私を切しやつたも、二人の子供を鎌倉へ、品よう遣たい心で有たか、そういふ事とは露しらず、大惡人の腰扳のと、惡口言たが耻しい、イヤ夫より

も此源藏、叔父を叔父共思はざる、天罰何と成べきと、親子三人顏見合せ、跡に成たる諄を、數へ立て〳〵、詞の限り聲限り、涙果しはなかりける、お石は立て一間なる、君の位牌を守奉り、死骸に向つて御口うつし、詞「いかに源四郎、未練不忠と後代迄、汚名を殘すも某が、仇を報はん心ざし、至つて切なる汝が心底、あつたらしき武士を、無實に殺す殘念やと、そゞろ涙に亡君の、位牌も諾く計なり、詞「ア、ア嬉しや悅ばしや、大惡人の妹と言れて死でも是非ないに、お石樣の今の計らひ、源四郎殿も此戸難瀨も、未來成佛致します、どうぞ息有る其中に、そなた衆二人の旅立を、見て死るのが此世の土產、サァ〳〵早うと勸る母、お石は涙の梵論僧笠、取て渡せば姑の、恩を戴く報謝返し、未來の迷ひ晴さん爲、詞「かゝ樣のお身の上、宜しく賴み上ますと、涙の雨に尺八の、歌口しめし立出れば、兼て覺悟のお石が歎き、夫や我子に言傳も、名殘惜さの山々を、言ぬ心のいぢらしき、手負は今を知死期時、かゝ樣、申し母人と、呼べど答へも斷末魔、親子の緣も魂緒も、切て一世の憂別れ、ハット泣兄泣妹、俱に死骸に姬の、回向念佛や會者定離、出行足も立留り、六字の御名を笛の音に、詞「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、鎌倉山へ旅立も、戀と忠義と追善供養、見送り見返る暇乞、心殘して三重「出て行

下之卷

唄「花に遊ばゝ、祇園あたりの色揃へ、東方南方北方西方、彌陀の淨土が塗に塗立ぴつかりひかゝ、光り輝く始や藝子に、いかな粹めも現ぬかして、ぐとんどろつくどろつくや、アイ〳〵ノワイトサ、詞「誰ぞ頼まふ、頼みましよ。是は闘しい、ホヲ是れはお女中客、粹なお出立マアゝ是へ。イヤ〳〵きつう取込そうなが、どれぞ座敷が。ござります共、此間から東のお客、比良大盡の居續け、大座敷はふさがつてござりますれど、亭座敷が明てござります、中居共〳〵、お茶上ませい〳〵。イヤ是御亭主、かるといふ女郎がお望故同道して參つたが。アイ成程、おかる樣も揚詰で奥にでござります。ム、夫は幸ひ、どうぞ逢れまいかの。さればでござります、どうぞ首尾して借まして上ませう、マアお煙草盆お盃、ドレお銚子も高調子、心奥には太皷三味。詞「ナフ平右衛門殿、此一力は夫由良之助殿の遊び茶やと、兼ては聞けど今夜が始め、今亭主が噂した、東の客とは推量が大方。左樣共〳〵、道々も申した通り、必御油斷なされますな。ソリヤちつ共油斷はせぬが、マア差當つておかる女郎に。イヤ其事は亭主に今一度。そんなら爰に待て居まする。拙者は勝手に後程と、志めし合せて平右衛門、別れてこそは入にけり、詞「手の鳴方へ、〳〵、とらまへよ〳〵。比良鬼やまだい〳〵、とらまへて抱て寐よ、〳〵、コリヤとらまへたは、サア〳〵酒〳〵、銚子持て〳〵。ヲヽこりや何とさしやんすへ、南無三寶こりや違ふた、御免候へたはい〳〵。ヲヽ氣の毒、比良樣わし等は奥へ行ぞへ、女中樣是に

へ、唄「實は心に思ひはせいで仇な、惚た〳〵の口先は、いかひ艶では有るはいな、詞「終に見馴ぬ女中じやが、獨爰には何してぞ。アイ女郎を買に來ましてござんす。ハテナ、女子が女を買といふは、置ぶるしの〇〇〇〇、ねつから用に立ぬ事、シテ其女郎の御假名はな。アイかるといふのが望でござんす。ム、、あのおかるをや。アイ。扨てもきつい時花觀音、身共も頃日揚詰にはして置ど、尊い所へ〇〇やらさぬ、彼丹波與作が歌に、江戸三界から遁々と、いつ逢し やんす事じややら、〇〇〇殺して下さんせ、放れはやらじといふ中も、ころりと轉けて高鼾。詞「コレ〳〵申しとゆすつても、正氣やくたい白川夜船、お石は傍り窺ふ中、勝手から亭主かけ出、詞「申し〳〵、おかる樣を追付借ます、マア夫迄は圍ひの間で、始めてのお盃、戴きましよと友治の土産、手に持ながら案内に、つれてお石は奥に入る、供部屋からさへすつた〳〵、息をはかりに奴の雁助、詞「コハ正躰なき旦那の有樣、起すも人の耳近しと、枕元に立寄て、纏にかはる番脇指、鯉口ちやんと響かしても、たはいなければ、詞「コリヤ油斷、大事を抱へて不用心、コレサ〳〵と後から、持起されて伸欠氣、詞「雁助來たか、一ツ呑めさ。いや酒所じやでざらない、ちよつとお耳を。ム、、〳〵、何由良之助が女房。シイ、參つた樣子を。出かした〳〵、扨は今の女が、よし〳〵、コリヤ雁助、そこらに忍んで。ナイ〳〵〳〵、點頭奴は椽の下、奥よりざは〳〵中居共、詞「サア〳〵申しお出んかいな。又もり潰すといふ事か、おかるは

どうじや。アイおかる様は術ない迚、小座敷に寐轉んでゝござります。ドレ〳〵起して酒にせふ、呑や諷へや一寸先はやくたいじや、斯醉たら梅干、茶か鹽茶か枳槻、温飩豆腐で呑かきよと、騒に紛れ入にけり、跡へおかるはほら〳〵と、亭主が噂菊の露、酒に浮身を任せ共、任せ兼たる座敷の首尾、そつとはづして中の間へ、兄にも間の暖簾から。詞「コレ申しおかるさん、お前に逢たいとおつしやる女中、揚の様子を申したりや、そんなら此文届けてくれと、おこしてゞござんした。ヲヽいかい世話じや有たのふ、呵「父よ母よと泣聲聞ば、妻に鶏鵡のうつせし言の葉、エヽなんじやいな、置しやんせ、おかるは傍見廻して、釣燈籠の明りを照し、讀長文はお石より、始終の様子こま〳〵と、女の文の跡や先、ち〳〵ではかどらず、濡の文かと比良大盡、肝癪發し亭の上、見おろす遠目讀兼るを、思ひ付たる髪扱鏡、あり〳〵移る天下一、様の下には雁助が、くり下す文月影に、透す計でひつとつも、讀ぬ無筆の無念顔、上には現の鼻毛扱、はづみにばつたり取落せば、はつと見上て隱す文、詞「比良様か。おかるか、そもじはそこに何してぞ。わたしやお前にもり潰され、餘まりつらさに醉覺し、風に吹れて居るはいな。ムヽ、はてなふ、よう風に吹れてじやのう。イヤ申し比良様、ちと咄したい事がござんすけれど、屋格越の天の川で、爰からは言れぬ、ちよつと下て下さんせぬか。ムヽ咄したいとは頼みたい事かや。マアそんな物。ドレ廻つて行ふ。イヤ〳〵、檀梯子へおりさんしたら、中居衆が

見付て呑そゞへ、アヽどうせうなア、アヽ是々、幸ひ爰に九ッ梯子、是を踏へておりさんせと、小屋根へかくれば、詞「おいとは言へどどんたいが、曲馬の梯子見るやうに、ぐはた〳〵動げばちやつと引、詞「イヤ此梯子は勝手が違ふて剛い様な。テモ臆病なお方では有る、お前は男じやないかいな、女子の私さへおりた事が。夫でも足がびり〳〵する物。これいナア、梯子を持て居るはいなア、三間づゝまたげさんしても。足が○本有るといふのか、アヽあれ〳〵、猪牙船に乘た様な。道理で舟玉様が見へるはいなア。エヽ覗くない〳〵。アイ髪だらけの尾花原、武藏野の月を拜み奉る。イヤもうそんならおりやせぬぞ。おりさんせざ下してあげよ、また悪い事を。ヲヽやかまし、丸額か何ぞの様に、逆縁ながらと後から、ぎつと○しめ、○○られて、猶上ずりに鳴神の、どつさり落て、詞「アイタヽヽヽ、ヲヽ笑止、怪我はないかと撫さする君が手先が打身の薬、詞「申し比良様、お前は何ぞごろじやつたか。ムヽいや。イヤ見やんした で有ふ。サア何じややら面白そふな狀と見た。アノ上から皆讀んしたか。テモくどいは。アヽ身の上の大事とこそは成にけり。エヽ何のこつちやぞい。サア何の事とは比良様、古いが惚た。女房に持て下さんせ。置きや、嘘じや。サア嘘から出た眞でなければ根が遂ぬ、おうと言んせ〳〵。イヤ言まい。なぜ、そなたのは嘘から出た眞じやない、眞から出た嘘じや、根が遂ぬ。ソリヤ何で。ハテ此間からなぜ寐てたるもらぬぞ。サイナ、それはナ。おかる受出そう。エヽ。

嘘でない證據に、たつた今でも身請せふ。イヤわしには。ム、間夫が有るか。イ、ヱ。いや有るで有ろ〳〵、斯言ふからは三日なり共。アイ嬉しうござんすと、言して置て笑をでの。イヤ直に亭主に金渡し、今の間に埒さそう。そんなら必違ひはないかへ。サア違ひはなけれど、ふつて〳〵振付たそなた、誠が見たい。指でも切かへ。ソレよかろ、サア今爰でと膝摺寄れば、引寄て、疑ひ深いお方じやと、兩手を○○○○、コリヤ堪らぬと○○返す、氣は上づりの○で息、詞「サア指切と差添刀、扳んとする手をちやつと押へ、詞「コレ指を切るには此刀、此差添では切さぬと、諍ふ椽先亭の上、お石は件の繪姿取出し、引合せたる面躰恰好、紛ふ方なき高の師泰、おかるは態と口舌の仕こなし、詞「同じお前の其脇指、隱さんすのは氣が悪いと、取に掛るを。詞「コレおかる、心中見へた切に及ぬば。イヱ〳〵〳〵、勤の意地なら切ねば立ぬ、どうでも望は其指添。どつこいそうはと突飛し、詞「ム、此差添を望むは曲者、合點が行ぬ樣子を言へ。ヲ、いふ迄もない鹽冶の忠臣、敵の片はれ師泰殿、知たは春中の其逃疵、隱す刄物は尋ぬる天國、何と違ひは有まいがの。ヲ、それを知たら赦さぬと、するりと扳打、ひらりとかはし、又切付るを、有合三味線、かつ取のべてはつしと請、詞「親の最期を見捨るとは、人でなしの猫の皮、未練比興の手の内では、誠の人は切れまいと、拂ふ刀の花櫚胴、得たりや紫檀の延棹にて、裾を拂へば、飛越す早足、眞向二ッと振上る、腕首ちよつと天柱のあしらひ、三筋の

糸のかよはきも、思ひ切てはかひ〳〵敷、後にお石が聲高々、詞「大星由良之助が女房、其天國の詮議に來た、比興な師泰そこ動くな。シヤちよこ才な女原、雁助參れに、ナイ〳〵〳〵、かけ出る寺岡平右衛門、家來が切首引提出、詞「ホ、妹出かした、お石樣、雁助めは此如く、首かき切たりや最早一本立、ヤア狼狽武士の犬侍、足利家より預つた天國の短刀迄、己と盗む重罪人、サア繩ぶつて鎌倉へ引立る。イヤ案外なる腮骨、ほでぼしさへたら手は見せぬと、又振上る刀の下、まつかせ丁ど扳合せ、二打三打てう〳〵〳〵、受太刀しどろ師泰が、足首おかるが引戻す、はづみにどつさり起しも立ず、肩骨脊骨三寸四寸、明所もなしに疵だらけ、のた打廻つて、詞「ア、是申しお前方〳〵、命計はお助と、ほへ頬することそ見苦しき、髻摑んで平右衛門、ぐつと捻付挫付、詞「儕が樣な人畜めに言聞すではなけれ共、妹おかるが相伴に、耳をさらへてよつく聞げ、既に去る十四日、儕が親の師直めが、首引提んと出立徒黨、松葉が谷の敵の館、忍び寄たる心の内。ヲ、嘸悦びでござんしよなう。サア〳〵平右、斯の如く取圍めば、敵の首は手裡に有、其方迚も主君の仇、討取たるも同然なれば、是より都へ馳登り、瑞松院の後室へ、此趣を申上、我々共が妻子へも、事の子細を告くれよと、數通の御狀受取たれ共、折角是迄仕寄た事、せめて敵の首見る迄、混辭退仕たれ共、相殘る我々も、殘らず殉死と極めたれば、其方一人活殘り、御舍弟鹽冶大助殿、御先途見屆奉る

が、死に勝る忠義ぞと、くれ〳〵重き御頼み、是非なく其場を引取た、マ心の内の本意なさは、どの樣に有たで有ふ。ヲ、尤じや道理でござんす、聞さへばいなう思ふ物。サ、サ、急ぎの御狀は取受たれ共、餘まり餘り殘念さ、夜の引明迄うろ〳〵と、外面に彳み經廻りしが、武藏守師直を、討取たりと呼子の笛、天に響いて聞ゆるを、思はず知ず飛上り、踊上りて我悅び、勇進んで知せの早打、都へ登つた甲斐有て、コリヤ今日といふ今日敵の片われ、此師泰めが首取のみか、ソノ天國の短刀迄、取得たる我本望、何に譬も有べきかと、悅び涙寺岡が、忠義一途を顯はせり、おかるも涙にくれながら、兄の悅び聞に付、勘平殿は三十に、なるやならずに死しやんして、現在お主の敵討、草葉の陰でも嘸や嘸、けなりがつて居やしやんしよと、思ひ出して夫の事、數へ立たるないじやくり、理りせめて哀なり、お石は猶も涙聲、詞「此年月の憂艱難、數へ立たるないじやくり、理りせめて哀なり、お石は猶も涙聲、詞「此年月の憂艱難、四十餘人の人々は、親に別れ子に放れ、一生連添ふ女房迄、君傾城の勤をするも、亡君の仇を報じたさ、寐覺にも現にも、御切腹の御事を、思ひ出しては無念の涙、詞「左樣共〳〵、足輕風情の私さへ、口惜い無念なと、月日をかぞへ指を折、御本望の其日迄、五臟六腑を絞りしぞや、詞「兄樣そうでござんする、私が夫も數ならねど、先立しやつたも師直故。ヲイやい、五體も一度に惱亂し、四十四の骨々も、碎る樣に有たはやい、獄卒め魔王めと、いふてはぐつしやり、ぐつしやぐしや、切さいなみし有樣は、傍で見るめも心地よし、詞「ホ、兄弟共に適

忠義。褒美は爰にと懷中より、取出し見せたる島の財布、詞「勘平殿の忠死を感じ、燒香の第二番と、夫の方からおらせの文、中なる金子はおかる女郎、里の苦患も亡夫の、菩提を吊ふ紫摩黃金。ヱ、有りがたふござりますと、戴く中にばら〳〵と、藝子仲居は走り出、詞「扨はお前はお石樣、樣子は聞ておりました、由良樣には前どから、たんと御恩を受ました、わたしら迄が悅びますと、お文の端によい樣に、入筆頼み上ますと、浮氣仲間も相應に、誠の道はおるやらん、女童に劣りし師泰、詞「コレ〳〵中居衆藝子樣方、よい所へ來てくれなつた、三人の此お衆へ、詫してたべと手を合せ、以前は高の若殿と、世に時めきし身を持て、三拜するぞ見苦しき。詞「此場で殺さば言譯むつかし、醉どれの躰にして、舘へ連よと、羽織打着せ疵の口、隱れ待たる亭主の才兵衛、詞「もうお歸りかと差出す手燭、ふつと吹消し。是々平右衛門殿、呑過した其客に、加茂川でナ、水ぞうすいを上ませい。ハア。イケ、花ならで、雪のながめも桐が谷、桃の井若狹之助保明の舘には、義士の面々預りて、さのみ警固に及ばねど、上を憚る心から、親子兄弟引分て、間毎を隔置巨燵、和漢の軍書歌書誹書、又は畫工に言付て、席書鹿書輕書の、忠義は重き人々に、馳走は筆も及ばれず、膳部の給仕酌取迄、侍分は窮屈と、態と女に差圖して、鬱症させぬ氣扱ひ、姻共は寄こぞり、詞「ナントおやな殿、おつや殿、こなた衆はどう思やる、去年から此お舘へ、預けられてござるのは、きつい忠義な衆じやげな、こちらが爲には目

の正月、若いお方もたんと有れど、どれも〳〵堅いお方、わしらは隨分氣を付て、立居萬事にそこら傍り、見せかける樣にするも、忠義無双の胤なりと、殘したいと思ふのに、いつぞは腹を切るのじやげな、いとしぼいではないかいの、ア、これ〳〵おしめ殿、殿樣のお心には、助命とやらいふて、殘らず助けるお願ひもなされたげな、殊に舘のお姫樣、力彌殿にきつい惚やう、そんな事になつたなら、先へお果なされふと、噂取々なる所へ、父が名も所領も直に請繼本藏、衣服上下大小も、遺家老の其骨柄、禮義正しく打通れば、妙共は氣味悪く、こそ〳〵立て入る跡へ、舘の主若狹之助、奥よりしづ〳〵歩み出、詞「ホヲ、毎日の出仕太義〳〵、父本藏が忠義といひ、歸參の大功立たる故、本知相續役義も其儘、寺岡が方より其方へ、送り越たる天國の短刀、直義公へ差上、義士の汚名をすゝいだ上、助命の願ひも致し置ば、今日が絶躰絶命、妹千草といまだ婚禮はせざれ共、台命によつて一家の因、心よからぬ藥師寺と、評定所の對決なれば猶以て一大事、汝は隨分皆共へ、心を付けて饗應べし萬事は、歸宅と言含め、悠々として登城有る、本藏跡を見送りて、詞「陪臣ながら冥加の武士、惜ませ給ふ心から色々と御心配、某迚も妹が緣に引るゝ有難さ、只伏拜み居たりける、妙共に誘はれ、立出給ふ千草姫、三五の春は迎へても、まだ三日月の細眉は、夕暮近き未開紅、色も香も有る品形、詞「コレハ〳〵千草樣、殿樣御登城の御留主は、義士共へのお心づかひ、御苦勞を遊ばすげな、殊に力を

も入られず、彌情をかけ給ふと、妙中の取沙汰と、力彌が事を文字割に、異見するかと千草姫、詞「ヲ、耻しい本藏、そなたの妹小涙とは、夫婦の緣のアノ力彌、惚た迚どうした迚、何と〇がかはされう、まして妾は意路悪の、アノ藥師寺へ嫁入と、直義樣の御上意を、背かれもせず兄樣も、詞「是非に及ばず一家の因、そんなら主有る我身の上、いやな夫に添ふより、こがれ死だらひよつとマア、詞「思ふ殿御に添れふかと、はかない事を願ふ氣が、其色外に顯はれて、面目ないと大名の、姫も任せぬ戀の道、理りせめて哀れなり、加古川も涙にくれ、姫の心を慰めんと、疊ふ紙取出し、詞「其中に籠たるは、御預りの義士共が、衿に付たる金の短冊、武士の冥加を存ずる故、某所望致し置、則裏はいろは假名、四十七字の合印、其假名を寄合せば、無量の戀歌も言るゝ道理、彼戀人が來りなば、お慰に事寄て、責て心のたけ成共、黄楊の小櫛と言さして、一間をさして入にけり、籠鳥の雲を乞ふ、とらはれの身に有ね共、力彌は深き身の願ひ、出る姿もしほ〳〵と、姫の御前に畏る、妙共は爰こそと、件の短冊押ならべ、目顔ですれど千草姫、耻しそふにおづ〳〵と、傍へも行ず戀人の、顔に見とるゝ有樣は、春待得たる福壽草、床に飾りし如くなり、詞「イヤなう力彌殿、嘸退屈にござらうの、何がなと思へ共、兄樣は登城のお留主、させる事も得しませぬ、妙共が思ひ付、いろは合せの此短冊、近ふ寄て俱々に、ならべてやいのと言つゝも、戀の角文字いろは假名、手本も上ぬ無器用さ、詞「そなた

に惚たと寄添ば、そつとはづして逃行袂、引留て涙ぐみ、詞「聞へぬぞや力彌殿、始めて逢た其時から、あんな殿御に添たいと、慕ふ心は鴛鴦の、池を隔て住心、けふ迄言ぬ胸の中、あかす心はそもやそも、耻しいやらつらいやら、忍ぶより猶やるせなき、上々樣の奥話文も、別に違はぬ樣々に、かぞへ立たる恨泣、おこぼにも又可愛らし、力彌も岩木ならざれば、御心根を思ひやり、暫し詞もなかりしが、數ならぬ私を、左程に思し下さるを、いなむには有らね共、詞「親にて候由良之助、一ッ舘に住ながら、今日迄對面せぬも、其短冊のいろは假名、取も直さず四十七人、四十七字の留り文字、横にかぞへて讀時は、とがなくてしす我々なれば、親子の愛執斷切心、妹脊の結びも眞其通り、恨みと思ひ給はるなと、理り深き言譯を、聞程悲しき千草姫、詞「切腹すると覺悟して、思ひ切ても居てゞ有ろ、心は互に一世の別れ、無逢たいで有ふ物、兄樣の目を忍んでも、親子の對面させませう、其かはりにはお情に、二世の結びをしてたべと、まさかの時は詞さへ、貴賤の別ちないじやくり、はなれ方なく見へにけり、力彌も父が顔見たさ、詞「左樣ならば後程迄、色よいお返事首尾と首尾、互に堅き約束も、心にこめし奥と口、引別チクリ「れてぞ入跡へ、降しきる、二月の空のはだれ雪、衣に落て露更、顔を隱せし天蓋も、着つゝ馴にしお主の舘、兄本藏が案内にて、櫛形の間に打通れば、奥へ通路の鈴の綱、音なふ聲に千草姫、姚引連立出給ひ、詞「見れば優しい薦僧修行、本藏の噂の通り、笠を取ぬは

宗旨の掟、苦しうない近う〳〵、コハ有がたき御詞、お預りの客人へ、何がなと存ずるから、招き寄た女の薦僧、千草樣の爪音に、合せたい逢たいと、思ふは同じ思ひなれば、憚りながらソレ〳〵と、詞の中に姚共、面白かろと玉琴を、姫の御前に押直せば、障子細目に由良之助、本藏はたばこ盆、お客の相伴致さうと、傍へに寄て吹きせる、煙りは富士と淺間山、空に消行つま琴に、逢たさ見たさ一筋に、思ふ心の竹の音も、唄「我や鹿、人慕ふ身と見し夜のうつゝ、夢の通ひ路枕に問はゞ、有やなしやと箒木の、園はら山の月に磨ぐ、胸と胸とにァ、辛氣、競べて同じ袖かゝみ、秘曲も終れば由良之助、障子押明立出れば、思はず笠を取る小涙、眞君かと言たさも、引留られて本藏が、後に隱るゝ形そぶり、見ても見ぬふり知ぬふり、千草姫に打同ひ、詞「我々しきの賤しい者共、冥加に餘る御爪音、夫さへ有るにァノ薦僧、山坂越て遙々と我心を慰めんと、吹て聞した竹の音色、千萬無量を心にこめ、ヲ、嬉しいぞよ悦ぶぞよ、此爪琴も笛竹に、飛立程にも逢たからう、そこを逢ぬは心の覺悟、親子夫婦の愛着も、まつ此通りと扳打に、琴を二ッに切割たり、姫と小涙は悲しさの、中に本藏横手を打、詞「ハァ、潔き御心、是に付ても去年の冬、師直舘へ夜討の首尾、語つてお聞せ下されと、望かけられ由良之助、詞「事新しき言條なれ共、君父の仇は俱不戴天、義氣鐵石とかためたる、徒黨の人數は揃へ共、用心堅固の敵師直、いかゝはせんと思ふ折節、過行給ひし貴殿の親父、本藏殿の厚志によつて

敵地の案内知たる故、天よ川よの合詞、しめし合せし徒黨の人數、二手に別れて押寄せしが、詞「ヲ、勇ましき其夜の手配り、繼梯子にて塀を越へ、忍び入りしと聞及ぶ、詞「ヲ、夫〳〵そうでござんす共、長屋〳〵へ矢を射込、起出る者を討とめて、猶も竊に椽側の、雨戸はづせば直に居間、爰を仕切て斯責てと、我を忘れて小涙が勇、詞「よくも知たり去ながら、用心嚴しき高の師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸に合拴合樞、こぢては外れずかけやにて、壞たば音して用意せん、サ、、、其時仕樣はいかに〳〵、爰ぞと姫に目くばす本藏、庭に折しも雪深く、さしもに強き大竹も、雪の重さにひいわりと、しわりし竹を引廻して、鳴居にはめ、詞「此ごとく弓を拵へ弦を張、鳴居と敷居にはめ置て、一度に切て放つ時は、まつ此樣にと積つたる、枝打拂へば雪ちつて、延るは直なる竹の力、鳴居撓んで溝はづれ、障子殘らずばた〳〵〳〵、内には力彌が見合す顏、我夫かいのと駈寄小涙、振放して逃行を、ヤア〳〵躬と呼とゞめ、詞「此計略とは知たれ共、折角逢に來た小涙、御恩に預るお姫樣、思ひも晴せて進ぜたさ、コリヤやい、何ぼ立派に言て居ても、親じやもの子じや物を、逢たふなうて何とせう、ア、我ながら未練の歎げき、傍輩共にも蔑せられん、此世の對面是限りと、見返りもせず由良之助、奥深くこそ駈入たり、跡打ながめ三人は、猶かきくるゝ胸の闇、暫し詞も泣ばかり、小涙は涙押ぬぐひ、詞「お姫樣のお情で、親子夫婦の暇乞、心よう相濟からは、わたしに遠慮は少しもいらぬ、お約束の未來

の結び、早う叶へて上ましてと、すゝむる詞に千草姫、詞「そんならさつきの一部始終、ハイ本藏殿が立聞して、ヱ、耻しいと懷の、守り刀を取出して、咽にがばと突立給へば、コハ何事と驚く兄弟、力彌もあはて駈寄て、介抱する手に取縋り、泣より外は正躰も、血汐に詐ふ涙なり、下城を急ぐ若狹之助、戻りかゝりし此場の時宜、千草が最期も嘸有らんと、むせぶ涙を呑込で、猶も子細を窺ひ聞、手負は苦しき聲音にて、詞「ノウ小涙、そなたは知ぬと思ひの外、戀の取持して下さる、其美しい心躰に、主顏して力彌殿と、何と枕が替されう、詞「悪人ながら藥師寺迎、言號の夫も有、若狹之助が妹は、いたづら者じやと人の口、夫ではいとしい戀人の、忠臣の名も消る、詞「どうでも、斯でも切腹と、覺悟を聞た力彌殿、わしや極樂へ往て待ますぞや、未來の緣はコレ小涙、赦してたもと手を合せ、主が家來に詫涙、扨はそうしたお心か、わたしが夫と知ながら、戀を仕掛る我儘な、お姫樣じやと有やうは、恨んで計おりました、夫に逢して貰ふたる、義理計かりで戀の取持、其取持が枷となり、自害遊ばすお前のお心、わたしは結句消たいわいナァ、詞「主殺しも同じ事、其かはりには未來では、ほんまにほんに悋氣はせぬ、一ッ蓮で新枕、かはしてたべと伏轉び、前後不覺に見へにけり、お主の別れに加古川も、力彌はいとゝ妹と脊の、二人が心を察し入、詞も涙ばかりなり、流石骨肉同胞の、妹が別れに若狹之助、隱れ家を打忘れ、ちづ〳〵と歩行寄、詞「子細殘らず皆聞たり、某今日藥師寺と、對決に

及びし所、渠儂悪逆露顯の上、所領取上縛り首、其方と縁談も、變約仰付られたれば、誰憚らぬ未來の契り、せめて此世の餞別ぞや、心よふ臨終せよと、脇目に紛らす別れの涙、力彌も傍に寄添ふて、詞「現世は暫し假の宿、未來は必ず夫婦ぞと、手を取かはすが三々九度、見かはす顔の色直し、本藏立寄小浪が黒髪、根よりふつゝと切拂ひ、詞「御恩を請しお主の菩提、尼になつたら夫はないと、手負に渡す恩返し、今般の姫は嬉しげに、皆々さらばといふ聲も、風の吹まく春の雪、散てはかなく成にけり、跡や枕に取縋り、わつと計に歎き伏す、若狹之助は悠然と、詞「直義公も皆共が、忠臣義心を惜ませ給ひ、老臣學儒を召出され、和漢の舊記穿考有れども、切腹せさるが後代に、彌美名日の本の、國の譽れと評定極り、今日申の上刻に、御上使入來の筈なれば、心靜に用意せよ、某も又一統に、右の内意を告知さん、本藏小浪兩人は、妹が死骸佛間へと、心をこめて奥に入る、涙ながらに本藏小浪、力彌も俱に手を添て、野邊の送りに有らぬ共、尼が役目の經念佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無あみだ佛、南無阿彌陀佛、見送る力彌も翌待ぬ、死出の用意と打連て、一間へこそは入にけり、跡へ入來る禪衣の僧、義士が由縁や紫野、瑞松院と言ずして、一目にしるき其物躰、斯と知せに舘のあるじ、若狹之助も出席有り、詞「其名は兼て聞たれ共、拜顔遂るは今が始め、思ひ寄ざる

御光來、御用ばし候かと、挨拶有れば歡喜の眉、詞「仰のごとく尊前に、願ひと申すは外ならず、鹽冶の舊臣大星始め、四十七人、足利殿の評定極り、今日切腹仰出され、其用意なさるゝよし、街の風聞、愚僧は兼て懇意の間、末期の對面遂度望みと、念數つまぐりおはします、詞「ホヲ、尤成御願ひ、早速許容申したけれど、私ならぬお預けなれば、所縁の對面叶はぬと、詞も待ず瑞松院、詞「ハテ所縁とて出家の事、お赦しない迎歸らふか、せめて大星親子にと、立て行をどこへ〳〵、詞「事を分言聞すに、奥へ踏込不敵の出家、アレ引出せと下知すれば、捕た〳〵と組子の侍、追取卷たる顔見れば、大星親子千崎矢間、是はと靭るゝ瑞松院、若狹之助聲をかけ、詞「泉州堺の町人天河屋義平、義士共に對面して、嘸本望で有ふなと、星をさゝれて脫ぼる衣、頭巾を取ば撥鬢男、頭を蟲に摺付〳〵、三拜してぞ悅べり、大星義平を上座へ直し、遙下つて手をつかへ、詞「某初め四十七人、亡君の仇を報ふも、貴殿の厚志に有らざれば、何條本望遂らるべき、殊に最期の今日に、遠境入來下さるとは、宿報ならんと一禮も、詞を盡す後の禊、さつと開けば、原大驚、吉田富堀竹森なんど、四十餘人が一同に、詞「義平殿、一別以來今生後世の對面と、一人〳〵に暇乞、嬉し涙の打こそ有れ、詞「御上使の御入と、表に呼はる一聲は、千來萬古類ひなき、功名美名暉かす、基ひなりけり忠臣の、後日噺に書納む

忠臣後日噺 終

明和第九壬辰歲卯月七日

作者

北脇素仝
中邑阿契
豊芦州
若竹笛躬

明治二十九年二月十一日印刷發行
明治三十五年八月廿五日三版發行

忠臣藏淨瑠璃集
定價金六拾錢

編輯兼發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市本郷區丸山福山町六番地　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

帝國文庫

背皮金文字入洋製紙數壹册千頁以上

正價（●壹册金六拾錢●六册金參圓五拾錢●拾貳册金六圓九拾錢●廿五册金拾參圓●全部五拾册金貳拾五圓●郵稅壹册拾六錢●目方四百匁）

全部五拾册
出版完成

全部目次

●自第壹編至第四編　眞書太閤記
●第五編　源平盛衰記
●自第六編至第八編　南總里見八犬傳
●第九編　東海、奥羽、木曾、江島　道中膝栗毛
●第拾編　梅暦春告鳥
●第拾壹編　通俗三國志
●第拾參編　三馬傑作集
●第拾四編　柳澤、越後、加賀、伊達　騷動實記
●第拾五編　種彦傑作集
●第拾六編　京傳傑作集
●第拾七編　星月夜鎌倉顯晦錄　北條九代記
●第拾八編　通俗十二王朝軍談　通俗武明軍談　通俗清軍談
●第拾九編　甲越軍記　通俗吳越軍談　通俗漢楚軍談
●第廿壹編　楠廷尉秘鑑
●第廿貳編　風來山人傑作集
●第廿貳編　西鶴全集（發賣禁止）
●第廿貳編　滑稽名作集
●第廿貳編　其磧自笑傑作集
●第廿貳編　人情本傑作集
●第三拾編　氣質全集
●第廿壹編　珍本全集
●第廿壹編　赤穗復讐全集
●第廿六編　水滸傳
●第廿八編　忠臣藏淨瑠璃集
●第廿九編　四大奇書
●第廿四拾壹編　續氣質全集
●第四拾編　近松時代淨瑠璃
●第四拾貳編　大岡政談
●第四拾參編　高僧實傳（佛教各宗）
●第四拾四編　仇討小說集
●第四拾五編　馬琴傑作集
●第四拾六編　淨瑠璃名作集
●第四拾七編　俠客傳全集
●第四拾八編　續仇討小說集
●第四拾九編　近松世話淨瑠璃
●第五拾編

斗6B68

●第拾五編 後太平記
●第拾七編 京山全集
●第拾八編 落語全集
●第拾九編 並木宗輔淨瑠璃集
●第貳拾編 紀行文集
●第廿壹編 一九全集
●第廿貳編 漂流奇談全集
●第廿參編 邯鄲諸國物語
●第廿四編 續紀行文集
●第廿五編 續水滸傳
●第廿六編 傾城水滸傳
●第廿七編 文耕堂淨瑠璃集
●第廿八編 白縫譚
●第廿九編 白縫譚
●第參拾編 校訂時代鏡
●第卅壹編 常山紀談
●第卅貳編 萬物滑稽合戰記
●第卅參編 續一九全集
●第卅四編 黃表紙百種
●第卅五編 俳優全集
●第卅六編 俗曲大全
●第卅七編 續々紀行文集
●第卅八編 續馬琴傑作集

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館